様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ３ 日現在

機関番号：１２６０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０２５５９

研究課題名（和文）『新撰遊覚往来』ならびに『新撰類聚往来』の日本語学的研究

研究課題名（英文）Philological Study of Shinsen-yugaku-ourai and Shinsen-ruiju-ourai

研究代表者
高橋　久子（TAKAHASHI, Hisako）

東京学芸大学・教育学部・研究員

研究者番号：４０２１３６６５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：　『新撰遊覚往来』と『新撰類聚往来』は、『庭訓往来』に類似した形態の、室町時代を代表する大部の往来物である。当時の文化的教養を体系的にまとめており、中世の言語文化を知る基礎資料となる。にもかかわらず、従来は学術的に信用できるテキストすら存在せず、内容の検討も不足していた。それが文化史的資料として使用されることはあっても、日本語学的な検討を経ていないテキストを使用しては、学術性に限界があろう。この両書を日本語学の立場で研究することで、テキストの系統を明らかにし、正確なテキストを作成し、表記・語彙の検討を行った。結果として、古辞書との関係も含めて、中世の日本語と日本文化に関する知見を深めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　室町時代の往来物（一種の教科書）である『新撰遊覚往来』と『新撰類聚往来』の、テキストの整理と内容の研究は、表記と語彙を中心とする言語の実態を明らかにするという日本語学的意義だけでなく、中世日本の文化と社会に関し、隣接する教育史、芸能史、飲食文化史、文学史等にも貴重な資料を提供するものである。また、往来物と古辞書の関連を研究することにより、辞書史研究にとっても有意義である。

研究成果の概要（英文）：“Shinsen-yugaku-ourai”and“Shinsen-ruiju-ourai”,which represent the culture of Muromachi Era, are two voluminous ‘ourai-mono’books (Collection of coming and going letters use for education) in the form like“Teikin-ourai”. Although they are basic data of Culture and Language of Middle Ages Japan, their texts are not researched and arranged academically so far. In this research we tried the reconstruction of precise texts using knowledge of the science of Japanese. As the result, not only we elucidated the complex system of the texts of“Shinsen-yugaku-ourai”and finished the accurate translation and index of“Shinsen-ruiju-ourai”, but also, we obtained much new findings in the history of Japanese Language.

研究分野：日本語学

キーワード：往来物　古往来　新撰遊覚往来　新撰類聚往来　中世の語彙　中世の漢語　漢語の表記　古辞書

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

往来物（特に中世のいわゆる古往来）は、辞書史を含む中世日本語研究にとって重要な文献でありながら、従来は、教育史・文化史の資料として参照されるのみであり、テキストの整理も、語彙・表記を含む内容の精密な検討もあまりなされてこなかった。その一因は、群書類従・日本教科書大系のような、使用しやすいテキストを安易に用いる風潮にあったが、これらは学問的な資料として使用に耐えるものではない。研究代表者は、すでに『庭訓往来』に関して、日本語学的知見から整理・検討を行ったので、今回、『庭訓往来』を受け継ぐ往来物として、室町時代を代表する『新撰遊覚往来』と『新撰類聚往来』の両書につき、日本語学的研究を進めようとしたものである。前者については、『日本語と辞書』誌上で翻字と索引が掲載されていたが、テキストの系統の問題をはじめ、学問的検討の余地が大きかった。後者については、テキストの整理が全く手つかずの状態であり、質の低い慶安版本が一般に使用されていた。

２．研究の目的

『新撰遊覚往来』と『新撰類聚往来』は、ともに室町時代に作成された十二月型の往来物である。『庭訓往来』と同様、その時代の教養の全てを体系化するという目的意識があり、もちろん教科書（手習い）として作成されたものである。従って、その時代の文化の全体像を知るために必須の文献である。また、往来物の常として、語彙を過剰に掲載する傾向があり、語彙史研究、辞書史研究、表記史研究の各方面で、重要な資料を提供する。しかしながら、これらを研究資料として使用するためには、テキストの批判的な整理検討が必要なこと、言うまでも無い。以上の理由から、両書のテキストの整理、テキストの成立・系統の検討、語彙・表記に関する諸問題の検討、索引の作成等を行った。それを基礎として、往来物・古辞書の歴史の中で、それぞれの意義を考察し、中世の学術文化の研究を深化させることも目的であった。

３．研究の方法

『新撰遊覚往来』と『新撰類聚往来』はいずれも、良質な校勘を経たテキストが存在しないため、資料の収集を基礎として、テキストを決定することから着手した。次にテキストの内容を、語彙・表記に重点をおいて検討したが、基本的には各種の古辞書資料を参照し、また今日発達した各種のデータベースによって、和漢文献の用例を調査した。特に『新撰類聚往来』は、中に語彙集団を含むという特殊な形態を取るため、辞書的な性格を帯びる。そのため、古辞書との比較検討は重要であり、辞書史の中に位置づけるべき書物でもある。テキストの決定と並行して、索引を作成し、自らの研究に役立てると同時に、今後の研究に資するものとした。

４．研究成果

（１）『新撰遊覚往来』のテキストについて

『新撰遊覚往来』の諸本を、可能な限り収集し、比較検討した結果、それが大きく三類に分けられること、つまり、従来考えられていた古本系と流布本系の間に、中間本系が存在することが確認された。第一は古本系で、謙堂文庫蔵天文十三年写本・東北大学附属図書館蔵本・東京大学文学部国語研究室蔵本・内閣文庫蔵本がこれに属する。第二は中間本系で、高野山大学附属図書館蔵金剛三昧院本・叡山文庫蔵本がこれに属する。第三は流布本系で、寛文二年版・袋屋十兵衛版・柏原屋版・早稲田大学図書館蔵本・宮内庁書陵部蔵続群書類従本・学習院大学図書館蔵本がこれに属する。この三類の異同を詳細に検討した結果、古本→中間本→流布本へという変化を具体的に跡づける大量の証拠が確認された。同時に、古本系諸本の中では、天文十三年本が最も古形に近く、天文本→東北大本→東大本→内閣本という流れが推定できること、また、叡山本が中間本でありながら、比較的流布本に近いこと等の事実も確認された。なお、古本から流布本へ増補改定が行われているが、比較調査の結果、十二月往来全体に行われたのではなく、初めの三月分について熱心に行われたことが明らかとなった。以上の議論の詳細は、主として『新撰遊覚往来諸本の日本語学的研究』に掲載した。

（２）『新撰遊覚往来』の表記・語彙について

上に示したテキストの系統論をまとめるために、諸本間の語彙・表記の異同について、詳細な検討を行った。その過程で、いくつかの興味深い現象が確認された。１「蘇莫童子経」（古本の一部）→「蘇莫呼童子経」（古本の一部）→「蘇摩古童子経」（中間本）→「蘇摩子童子経」（流布本）のケースには、外国語表記の日本語化・俗化の流れが見られる。２「（口×屈）請」（古本）→「崛請」（中間本）→「招請」（流布本）のケースには、古い難解な語の淘汰の過程が見られる。３「車胤宣士」（古本・中間本）→「車胤孫弘（康の誤）」（流布本）のケースには、『童子教』から『蒙求』への変化が見られる。詳細は『新撰遊覚往来諸本の日本語学的研究』を参照されたい。

（３）『新撰類聚往来』のテキストについて

主要なテキストは、東京大学文学部国語研究室蔵天正四年写本（東大本）と慶安元年版本（慶安本）しか存在しないため、両者の比較を中心に検討を進めたが、前者は前半部しか存在しないため、後半については、もっぱらテキストの精読によって訂誤を試みた。その結果として、慶安本には、版に彫る際に生じたと思われる文字の誤りが相当数存在することが確認された。前半については、東大本が正しく、それに従うべき箇所が多い。後半についても、中巻の筆の異名「中書　君象　管如椽」が、それぞれの出典を検討した結果「中書君　象管　如椽」の誤りであることが解明されたように、句読を含めて問題が多い。詳細は『新撰類聚往来　影印と研究』の「校注」を参照されたい。

（４）『新撰類聚往来』の表記・語彙について

テキストの精読によって、従来難読であった箇所の読解が可能となった。慶安本には下巻に、「離高神色」なる難解な表現がある。これは韋荘の詩「傷心柳色離亭見」に基づくもので、「離亭柳色」が正しい。「亭」を「高」、「柳」を「神」に誤刻したものである。往来物は概して草書で書かれたため、後世に誤読される可能性が高いのである。このような問題に関しても、『新撰類聚往来　影印と研究』「校注」を参照されたい。

（５）『新撰類聚往来』の文学作品としての価値

『新撰類聚往来』を通読可能とし、現代語訳を作成することにより、一種の中世文学として理解する道が開けたものと思われる。『新撰類聚往来』は、『庭訓往来』や『新撰遊覚往来』が単に一通りの文化教養を伝授する目的で作成されたのとは異なり、全ての事象を体系化するという、百科全書的指向が見られる。と同時に、僧俗各階層の、喜怒哀楽が生き生きと記され、文芸として味読に耐える作品となっている。

（６）『新撰類聚往来』に関する新知見

本書の往来物としての性格を明らかにするために、論文「新撰類聚往来の特質と意義」を作成して『新撰類聚往来 影印と研究』に掲載した。その中で以下の点を明らかにした。１）往来物の発展史の中での位置づけを、構成表記の特徴から論じた、２）『新猿楽記』 の影響が大きいことを明らかにした、３）『易林本節用集』への影響が大きいことを明らかにした、４）全体として、本書が往来物に辞書の性質を意図的に加えて製作されたものであり、古辞書の歴史の中でも重要な位置を占めることを明らかにした。

（７）まとめ―『新撰遊覚往来』と『新撰類聚往来』

『新撰遊覚往来』が、『庭訓往来』の鎌倉的武家の実務的文化という内容を、室町的学芸の世界に置き換えながらも、全体の構想は『庭訓往来』を引き継いでいるのに対し、『新撰類聚往来』は、言語と文化の双方から、全世界を体系的に記述しようという、新たな発想が顕著である。しかしながら、それはあくまでも中世的仏教文化の枠の中で行われたものであり、当時ですら百科事典として使用されるにしては、中途半端なものであった。前者が「続庭訓往来」とも呼ばれ、『庭訓往来』を補完するものとして、近世にも大いに流布したのに対し、後者が写本も版本も少なく、あまり伝播しなかった所以である。ともあれ両書とも、中世の言語・文化の一級の資料として、今後の活用が俟たれるところである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 15 件）

① 高橋久子、中世国語辞書の特質と研究法、國語と國文學、査読なし、vol.96、No.5、2019、pp.62―73
② 高橋忠彦、高橋久子、テキストの劣化と叢書の功罪―茶書と古往来の場合―、日本語と辞書、査読なし、No.24、2019、pp.19―48
③ 高橋忠彦、高橋久子、漢語の表記と古辞書の位相―「豆腐」の場合―、東京学芸大学紀要 人文社会科学系Ⅰ、査読なし、No.69、2018、pp.196－174、オープンアクセス https://ir.u-gakugei.ac.jp/handle/2309/148739
④ 高橋忠彦、高橋久子、漢語の表記と古辞書の位相―「要脚」の場合―、東京学芸大学紀要 人文社会科学系Ⅰ、査読なし、No.69、2018、pp.172－156 オープンアクセス https://ir.u-gakugei.ac.jp/handle/2309/148738
⑤ 高橋忠彦、高橋久子、和語の表記と古辞書の位相―「ほかゐ」の場合―、日本語と辞書、査読なし、No.22、2017、pp.1―38
⑥ 高橋久子、下学集所収語彙の性格―態芸門―、日本語と辞書、査読なし、No.22、 2017、pp.39―52
⑦ 高橋忠彦、高橋久子、漢語の表記と古辞書の位相―「掃除」の場合―、東京学芸大学紀要 人文社会科学系Ⅰ、査読なし、No.68、2017、pp.186－152、オープンアクセス https://ir.u-gakugei.ac.jp/handle/2309/146889
⑧ 高橋忠彦、高橋久子、漢語「孔懐」の意味と位相―菅原道真の釈奠詩を手がかりとして―、

日本語と辞書、査読なし、No.21、 2016、pp.1―9
⑨ 高橋久子、下学集所収語彙の性格―畳字門―、日本語と辞書、査読なし、No.21、 2016、pp.11―22
⑩ 高橋忠彦、高橋久子、漢語の表記と古辞書の位相―「蠟燭」の場合―、東京学芸大学紀要 人文社会科学系Ⅰ、査読なし、No.67、2016、pp.9―76、オープンアクセス https://ir.u-gakugei.ac.jp/handle/2309/140073
⑪ 高橋忠彦、高橋久子、漢語の表記と古辞書の位相―「燈籠」の場合―、国語文字史の研究、査読あり、No.15、 2016、pp.43―64
⑫ 高橋忠彦、高橋久子、古辞書の漢字表記と書記言語の実態―「牓示」の場合―、日本語と辞書、査読なし、No.20、 2015、pp.1―27
⑬ 高橋久子、私用抄・初心抄・竹馬抄の連歌用語と温故知新書―諸本の関係を中心として―、日本語と辞書、査読なし、No.20、 2015、pp.29―82
⑭ 高橋久子、北野天満宮蔵佚名古辞書色葉集所収語の位相について、日本語と辞書、査読なし、No.20、 2015、pp.83―127
⑮ 高橋久子、下学集所収語彙の性格―言辞門―、國語國文、査読あり、Vol.84、No.9、 2015、pp.46―57

〔学会発表〕（計 0 件）

〔図書〕（計 3 件）

① 高橋忠彦、高橋 久子 編著、新典社、新撰類聚往来 影印と研究、2019、総頁 781（共同研究につき担当部分抽出不可能）
② 高橋 久子、高橋忠彦 著、古辞書研究会、新撰遊覚往来の日本語学的研究、2017、総頁 96（共同研究につき担当部分抽出不可能）
③ 高橋忠彦、高橋 久子、古辞書研究会 編著、武蔵野書院、いろは分類体辞書の総合的研究、2016、総頁 1246（翻字・索引作成;pp.303～794、以上は共同研究につき担当部分抽出不可能,論文執筆;pp.797～883,pp.939～1070,pp.1083～1133）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：高橋忠彦
ローマ字氏名： TAKAHASHI, Tadahiko

研究協力者氏名：三宅ちぐさ
ローマ字氏名： MIYAKE, Chigusa

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。